

れた。また皇太后、皇后兩陛下より負傷者に對して、左記目錄の御下賜品があつた。

- 一、綿織糸 百端 一、英吉利リント 二十卷 一、帛木綿 五百端
- 一、葡萄酒 千五百本 一、煙草 八百斤

第五章 日清戦争及臺灣守備

一、日 清 戦 争

開戦の理由 日清戦争の遠因ともいふべきものは、明治十七年韓國京城の變、防殺令事件、及び二十六年の金玉均暗殺事件等であるが、その直接の原因となつたものは、二十七年四月、韓國に起つた朝鮮の東學黨の亂である。この東學黨は、武力を以て國政の改革を斷行しようとし、先づ北邊の諸道に風靡して、五月全州に據つて將に京城を衝かんとした。從來動もすれば韓國を屬邦扱ひにしてゐた袁世凱（當時の駐韓公使）は、韓國を名實共にその屬邦となすはこの時にありと、狼狽恐怖せる韓國政府を脅迫して、強ひて清國に出兵を請はしめ、天津條約を無視して、ほしきままに韓國に向つて出兵した。そこで我が政府は、急遽大島圭介公使をして、八重山經の陸戰隊を率ゐて京城に入らしめ、ついで

0316

大島義昌少將に泥成旅團を授けて同じく京城に入らしめ、内外の警戒に當らしめた。是から日清兩國間の國交は、いよいよ危殆に陥り、大島公使はいはゆる五ヶ條の改革案を提げて、韓國王に迫つた。ついで韓兵の發砲、その報復、袁世凱の遁走等のことがあり、つひに七月二十五日豐島沖の海戦となり、陸軍は牙山成敵に兵を交へ、こゝに日清兩國は干戈相見ゆるに至つたのである。八月二日、宣戰の詔勅が發せられ、それと共に駐清公使小村海太郎は、國旗を撤して北京を引き揚げ、動員令は續々各師團に下り、大元帥陛下には御躬ら軍國のことに當らせ給ふべく、九月十三日大本營を廣島に進めさせられ、第一軍の組成成り、山縣有朋大將、軍司令官に任ぜられた。

動員令下る 九月十五日大本營廣島に到着す。この日第五師團長野津中將は、五萬の清兵が據守してゐた平壤の總攻撃を行ひ、血戰二日、翌十六日遂に之を潰亂せしめた。またその翌十七日、伊東海軍中將は聯合艦隊を率ゐて、優勢なる敵の主力艦隊を黃海に破つて大同江に飄散し、陸海の捷報相ついで到り、海上權は全く我が手に歸した。

かゝる中に二十七年九月二十五日、果然我が戰隊に動員を令せらる、將卒の士氣頗る旺盛、充員は何れも一刻を争ふて應召するの情況で、午前一、二時頃暗夜降雨を冒して到着する者も尠くなかつた。又一般に戰列隊に加はらんことを熱望懇願するなど忠君愛國の精神燃ゆるが如く、將卒一同歡呼

して出征の日を待ったのであるが、暫く待命を命ぜられ、掛巻する毎に、一同骨肉の嘆を發しつつあること約半歳、翌二十八年四月十八日出動の命を傳へられ、聯隊は同月二十四日市民の熱烈なる萬歳の聲に送られて青山停車場を發し、二十六日廣島へ到着して、滯在約一旬、四月五日進發の命を受け翌六日には將校同相當官一同拜謁を仰付けられ、尚縣會議事堂に於て立食の御宴を賜つた、かくて九日姫路九、伏木丸に分乗して宇品を解纜し、同十二日夕刻より十三日未明に亘つて大連灣に投錨、砲泊のまゝ命を待った。出征當時の主なる幹部は聯隊長大佐坂井重季、副官大尉宇津木碧吉、旗手少尉吉川竹次郎、第一大隊長少佐前山喜雅、第二大隊長少佐須永武義であつた。

尙此の時に於けるわが近衛師團の意氣込みは、實に凄まじいものがあつた。蓋し將校は悉く選拔者を以てこれに充て、また兵士は全團の新鋭を萃めたとはいはれた上に、他の師團が未だ悉く十八年式村田銃を以て固ひつゝある時、ひとり我が近衛兵は最新式の村田連發銃を持つて征途に就き、殊にその任務の如きも、北京突入の急先鋒を承ることといはれて居たので、まづ直隸の野に小手調べを行ひ、一路邁進して北京城を衝き、朕兵をしてわが赤帽を視ること、恰も當年の鬼清正の旗幟を望んで戰慄せるが如からしめようと、ひそかに期したのであつた。

ところが丁汝昌の率ゐる北洋艦隊は既に全滅し、陸戰に於いても金州城、旅順口、遼山關、蔚山、

二八
析木城、海城、威遠衛は既に我が手に歸し、今や我が軍は第二期作戰の計劃に着手し、諸軍を營口に集中して、直隸平野に一大決戦を試み、長驅して北京を衝き、清國をして城下の盟ひをなさしめんとしたのである。

平和克復　こゝに於て清國は、到底その勝算なきを知り、李鴻章は媾和の使命を帯びて馬關に上陸し、わが全權伊藤博文との間に、四月十七日を以て媾和條約の調印を終り、同二十一日平和克復に關する詔勅が頒發せられ、かくて幸か不幸か、我が聯隊の如き未だ一戦をも交ふるに至らずして、戦局は早くも終局を告げたのであつた。

二、臺灣征伐

轉じて臺灣に向ふ　かくて媾和條約の結果、臺灣島は我が領有に歸し、樺山資之と清國委員李經芳との間に、六月一日基隆三貂角港の海上に於て授受を終つたのであつたが、臺灣巡撫劉永福、清廷の命を奉ぜず、守備兵や島民を煽動して、その授受を拒んだ。此の例なる者は元黒旗兵の頭目であつて、戦勇を以て知られてゐた。蓋し清國は敗餘の軍を以て之を鎮定することの困難なるを考へ、故らに海上に於て引渡しを終り、日本軍をして搬定せしめようとしたのである。想ふに之は、日本軍を

して瘴烟蠻瘴の裡に多くの兵を損ぜしめ、莫大の費用を投ぜしめた上、長く怒みを土民に買ふて、爾後の統治に一大支障を來さしめ、之を以て一種の大義的復讐に代へようとしたのである。果せるかな我が國は、臺灣の匪徒鎮壓のために、多大の犠牲を拂ふに至つたのである。

五月十七日、臺灣守備の命は、我が近衛師團に下つた。そこで師團は、翌十八日第二軍の戦闘序列を脱して、臺灣總督の隷下に入り、同二十二日旅順を出發した。名は守備であつたが、實は臺灣征討であつたことは勿論である。かくて近衛歩兵第一旅團を基幹とする一隊は、師團長北白川宮能久親王殿下御躬ら指揮を執らせられ、二十九日臺灣島に進み、三貂角澳底に敵前上陸を行ひ、匪徒の本據基隆を窺つた。我が聯隊は前進軍の前衛となつて進んだが、進むにつれて道路は益々險惡、馬によつて砲車を運ぶことが出來ず、三貂大嶺を越ゆる時の如きは十餘名の兵が一門の山砲を曳くといふ有様で、多大の時間を費し、一方太行李の追及困難な爲め、糧食缺乏し、附近民家より得た味噌と塩麴粉とで雜粥をつくつて、僅かに飢を凌ぐといふ状態であつた。

金山及瑞芳附近の戦闘 六月一日聯隊は旅團前衛となつて前進中、三貂大嶺山下金山附近に於て賊と衝突し、前兵たる第五中隊は金山に據れる敵に向つて肉薄し、敵前百米の高地を占領して、一斉射撃を開始したところ、賊は死屍二十を遺棄して、倉惶として遁走し去つた。

三〇
六月三日第一大隊前進となつて進み、瑞芳附近に據れる敵を攻撃し、敵に多大の損害を與へ、偵察の爲めに來た敵の統帥張非遠に重傷を負はしめたが、我が隊の損害も多数に上り、飛彈は軍旗の竿頭を傷け、大隊長の袖を破り、大隊長の長轡を貫いた。尙第三中隊の岩本軍曹は決死隊七名を率ゐて突然敵營に突入し、敵の狼狽に乗じて中隊主力を突入、辛うじて之を抜くことを得た。前日來の戦闘に於ける我が軍の損害は戦死卒二名、負傷將校三名、下士卒二十一名であつた。

基隆附近の戦闘 敵の歩、砲兵は基隆西方高地に砲臺及び堡壘を築いて頑強に抵抗した。聯隊長の指揮する第一大隊は第一線となつて、専らこの突撃に任じ、惡戰苦闘の末、最後まで防禦線に在つて抵抗した二千の敵を駆逐して、午後五時十分全堡壘を占領し、川村旅團長は我が軍旗中隊と共に壘内に入り、天皇陛下萬歲第三聯隊軍旗萬歲を三唱、其の聲山野に轟き天地を振動した。かくて我が軍旗は最初に新領土の一角に翻り、今また敵の本拠たる基隆の壘上に、最初に植立せられたのである。

此の日聯隊の蒙つた損害は戦死下士卒三、負傷下士卒八、尙聯隊は敵兵四十五名を生擒し、小銃三八二、大砲一二、小銃三〇萬發、地雷三〇、其他被服糧食等多数の南獲品を獲た。

六月十九日第一大隊及び第八中隊は、聯隊長指揮の下に新竹枝隊となつて前進し、ゆく／＼敵を驅

遷して、二十二日新竹城を攻落し、同地に留まること五十日、此間屢次敵襲を受けたが、毎に之を退却し多大の損害を與へた、又第七中隊は太湖口に至つて同地を準備し、第二大隊主力は七月二十二日臺北を發して、板橋附近の掃蕩を行ひ、同二十六日臺北に還つた。

七月二十九日第二大隊は師團長に従つて臺北を發し、八月二日新竹に入り、こゝに聯隊は悉く軍旗の下に相會することを得た。

臺灣北部の平定 一歸りが政府は、初め臺灣の匪徒は、規律なき烏合の衆と思ひ、その鎮定は近衛師團のみで充分と判斷して居たのであつたが、彼等匪徒の常として、一旦は敗れ去つても、わが軍が深く内地に前進したのを見るや、再び各所に蟄集して、或は兵站部を襲ひ、或は市街に入つて掠奪し、恰も五月の煙の様に、追へば散り、去つては又集り、出沒きはまりなく、殊に嘉義、彰化、臺南方面には、尙ほ多なからぬ賊群がゐたのであるが、後方の危険を顧慮せねばならなかつたので、進んで之を攻撃することが出来ない有様であつた。そこで更に後備歩兵第一旅團及び混成第四旅團が増援隊として派遣されることとなり、後備旅團が北部臺灣要塞地の守備に就くのを俟つて、わが聯隊は八月八日、旅團長川村少將の指揮に屬し、右翼隊となつて新竹を發し、沈頭山及び尖筆山を略取した、時に第六中隊は師團後衛となり、第五中隊は新竹に停まりてその守備に任じた。

軍旗再び鮮血に染む 百後第一大隊(第四中)は新竹及び香山附近の守備に任じ、残餘の諸隊は八月十三日師團前衛として苗栗に向ひ、途中後壩を占領し、進んで坎開山の要塞を攻撃したが、元來坎開山の敵の陣地は、天然の地利を占むる上に、副防禦を設けた頗る堅固なものであつて、攻撃は容易でなかつたが、奮戦力開軍旗を擡して突撃に移つた。敵は周章狼狽、銃口を揃へて亂射亂撃し、旗手津野少尉は飛弾に胸部を貫かれ一度は地上に倒れたが、軍旗を放たず直に起き上り「大丈夫」と叫んで其體突入せんとしたが聯隊副官大野大尉、津野少尉を慰諭し、軍旗を奉じて突入し、遂に敵壘を奪取した、かくて我が軍旗は再び鮮血に染められ一段の光彩を添ふるに共に津野少尉の勇敢な行動は、陣中羨談として稱へられた。翌日苗栗を占領し、八月二十八日の彰化攻撃には右翼隊となつて奮戦し、之を陥落して我軍南下の第二関門を開いた。

八月二十九日師團は樟山總督よりの親電と共に南進中止の命に接した。越えて三十一日饒源なる勅語及び令旨を賜ふ。

嘉義の總攻撃 九月中旬、聯隊全部鹿港に集合し、逗留すること月餘、師團は三道より嘉義に向つて前進することとなり、聯隊(第二大)は右側隊となつて十月二日鹿港を出發し、往く往く諸所の賊巢を居つて前進した。

第二大隊は此の間影化及び日林街道附近に在つて守備に任じた。

十月九日嘉義城の總攻撃を決定して之を陥れたが、我が聯隊は此日四門の中三門を占領して大に武勇を輝した。

翌十日須永聯隊長は第一大隊及び近歩一の二中隊並に騎、砲、工兵の一部より成る攻撃隊を率ゐて嘉義を出發し、十一日鹽水港を陥れて、乃木軍に連絡した。

全島の平定と凱旋 わが近衛師團は、北方から敵の最後根拠地たる臺南府を壓し、一方また新

に南方に上陸した混成第四旅團は、北へ北へと進んで、これ亦反對の方面から臺南府に迫つた。十月十八日聯隊は右旅團に編入せられ南下して、二十二日臺南府に入つたが、此の時既に賊の頭目劉永福は風を喰つて海路廈門に走り、乃木軍は二十一日早くも臺南府を占領した。

かくて臺灣全島全く既定し、新領土は浴ねく 聖恩の恵みに當ふこととなつたのである。十一月二日優渥なる 勅語を賜はり翌三日天長の佳節に際し、總督以下臺南城内に盛んな祝宴を張り、同五日城、北門外に於て、戦死者の鎮魂祭を舉行す、上陸以來我が聯隊の戦死者は戦死二十九名、病死三百九十一名であつた。

その翌十一月六日聯隊の命に接し、聯隊は十一月十三日和泉丸に乗船して打狗を抜錨、十八日宇品

に上陸した。畏くも明治天皇には深くその功勞を嘉みし給ひ、特に廣幡侍從を上陸地に差し遣はされ、左の優渥なる聖旨を傳へしめ給ふ。

三四

天皇陛下思召覺書

近衛師團茲ニ凱旋スルニ當リ天皇深く幾多ノ困難ヲ經過シタルヲ苦勞ニ思召サレ特ニ勅使トシテ廣幡侍從ヲ字品ニ遣ハサレ慰問セシメラル
かくて我が聯隊(第二大)は、十一月二十二日、第二大隊は同三十日東京に凱旋し、十二月三日を以て復員を了つたのである。

噴師團長宮の薨去 臺灣の土匪は、その性儇悍勇武ではあつたが、もとこれ訓練なき鳥合の衆で、もとより武藝赫々たる皇軍の敵ではなかつた。しかし我が軍は、この賊徒と戦ふ外、更に忍るべき臺灣特有の瘴疫癘魔と戦はねばならなかつた。蓋し時あたかも酷暑の候で、日中の温度は實に百二十度を超え、瘴熱堪へがたいのに加へて、惡疫癘魔を極め、全隊員の過半を侵されて、野戰病院は滿員また滿員の慘狀を呈し、そのため命を墮すもの、その數を知らない有様であつた。しかしその中でも、最も悲しむべきことは、師團長北白川宮能久親王殿下の薨去であつた。

我が南下軍が、破竹の勢を以て臺南府に入らうとする二日前、即ち十月二十日、師團長宮には

瘡痍に罹らせ給ふた。將卒一同恐懼措くところを知らず、ひたすら謹慎して御平靈を禱り奉り、御
 近者は風々暫時退いて靜かに御加養あらせらるべき由を願ひ申でたのであつたが、御勅諭なく、病苦
 をおかして最後まで軍事を終し給ふたので、御病歿は次第に進み、二十八日總督樺山資紀、御病床
 に侍し、臺南府陥落して、殿下臺灣平定の御任務も既に御完了の旨を言上したところが、殿下には靜
 かに御眼を開かせられて、微かに頷かせられた。これを御名残として同日、御危篤の御容態のまゝ、
 御旅の途につかせたまひ、即日陸軍大將に御昇進、十一月五日東京御本邸に於て薨去の旨を御發表あ
 らせられた。

臺北府々々仁政成。

皇軍陣所湧ん散。

旭光將被臺南地。

鐵二彼渠冠安萬世。

これは臺南府に入る前、殿下御遠征の作で、臺北市外の臺灣神社(神社)は、故師團長宮の英靈
 を祀り奉つた所である。毎年十月二十八日の御命日には、聯隊は代表隊を以て、豊島ヶ岡の御陵墓に
 参拜し、今も尚ほその御盛徳を御慕ひ奉つてるのである。

0326